

「純情」の再検討

—ジーン・リードロフの『連続性の概念』をヒントにして—

高橋 徹（倫理文化研究センター専門研究員）

いわゆる道徳の感覚というものは外見はさまざまであっても、その根本にあるのはいのちの連続性であるように思われた。（ジーン・リードロフ）

はじめに

東日本大震災の4日後にあたる2011年3月15日、アメリカ人女性、ジーン・リードロフ（Jean Liedloff, 1926～2011）がカリフォルニア州サウスリートで亡くなった。84歳だった。リードロフは、同じアメリカ人で生年も同じJ.C. ピアス（Joseph Chilton Pearce, 1926～）と双璧をなす業績を残した。2人とも〈人間本来の子育てはどのようなものなのか〉を、欧米を中心とした現代の文明世界に思い出させたのである。ピアスについては、すでに過去の『倫理研究所紀要』の拙論でも何度か取り上げたが、リードロフについては今回、はじめて取り上げる。

以下、ジーン・リードロフの著作『連続性の概念(The Continuum Concept)』、の冒頭のプロフィールを翻訳・参照しながら、彼女の経歴を簡単に振り返ってみたい。

ジーン・リードロフは、ニューヨークで生まれ育った。ドリュー女子神学校を卒業し、その後コーネル大学に入学したが、学位を取ることなくヨーロッパへの旅を始め、それから南米のジャングルに向かった。彼女は、「西洋文明が、悲惨にも私たち自身の本性を誤解している」ことを確信するまで、ヴェネズエラで石器時代の生き方をするインディオの住む地域に四回遠征した。彼女はこの四回の遠征を振り返り、さらに確証を得るために五回目の遠征をして、その後『連続性の概念』を執筆した。

ジーン・リードロフは、『サンデー・タイムズ』の記事執筆者で、『エコロジスト』誌の創設者のひとりだった。彼女は現在、個人的な疎外および社会悪についての説明やその解決法を求める世界中の学生、医師、親、精神療法家や一般市民に向けてレクチャーし、放送番組を通じて情報を提供している。ジーン・リードロフは、ロンドンに住み、「連続性の概念」の原則に基づいた心理療法を実践し、教えている。彼女は、この研究や葛藤のない子育てに関する何冊かの著作を計画している。『連続性の概念』は、多くの国々で批評家からの大きな称賛を得ただけでなく、相当数の支持者を得ている。

上記のとおり、ジーン・リードロフは若かりし頃、イタリア滞在中に同地の男性2人の探検家と南米ヴェネズエラにダイヤモンド発掘に行き、そのことをきっかけに、イェクウアナ（Yequana）族というインディオたちの生活に触れて、自分たち欧米人が何を失い、何を忘れてしまったかに気づいた。その後、延べ2年半にわたって5回もイェクウアナ族の居住地に戻って、彼らと生活を共にした彼女は、そ

の体験を1冊の本にまとめる。出版されたのは彼女が49歳になる年、1975年。この本は英語圏で注目を集めただけでなく、1980年、ドイツ語にも翻訳されてドイツ語圏では10万部を超える売行きを示したという。ドイツ語のタイトルは、『Auf der Suche nach dem verlorenen Glück (失われた幸福を求めて)』というものである。日本では1984年、再改訂前の原著(1977年の改訂版)が山下公子氏の訳により『野生への旅』というタイトルで出版されたが、それから32年経過した今日にいたるまで、ほとんど注目されていない。ピアスの本もそうだが、このリードロフの著作もまた〈欧米で脚光を浴び、ベストセラーになった本が必ずしも日本で注目されるとは限らない〉という残念な例である。

本稿では、すでに絶版になって久しいこのジーン・リードロフの邦訳書から、その一部を引用し、それをヒントにして純粋倫理との関連を考え、純粋倫理の根幹にある「純情」をより深く理解するための一助としたい。

なお本論は、2013年11月27日に一般社団法人倫理研究所の研究員を対象にして筆者が行った研究発表の内容に加筆し、まとめ直したものである。紙幅の関係で前提となる「純粋倫理とは何か」についての説明を省き、ある程度、純粋倫理についての実践体験や知識のある方を対象にして書かれていることをご了承いただきたい。